

KODAK COLOR COPYLITHOGRAPH

© The Minnetonka Company, 2000

LICENSED PRODUCT

3/Color

White

Magenta

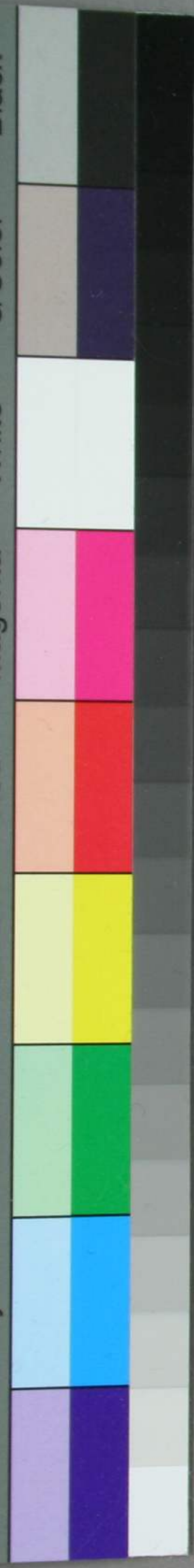
Red

Yellow

Green

Cyan

Blue



^13
3224
3



1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1

門 へ 13
 3224
 3

梅古与美三編序

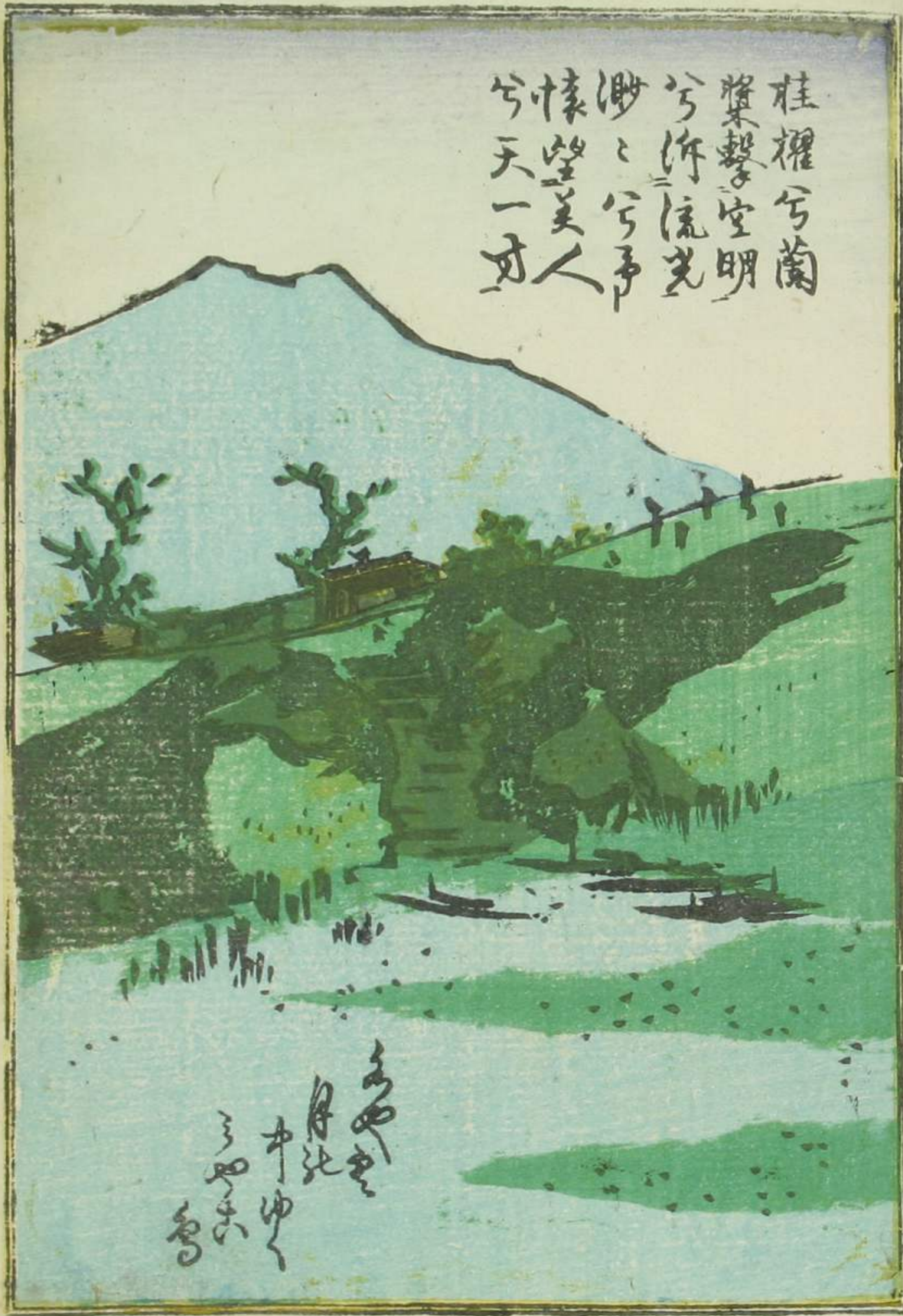
夫聖人之物子凝滞也今狂川之水

主人之物子仰天而驚也

中尔任たがう悠々然と之能と世推

移る人情を書者たる和漢の理

昭和十一年
 七月四日
 漢求



桂權兮蘭
 葉擊兮明
 兮所流光
 渺兮予
 懷望美人
 兮天一
 方

中
 此
 三
 三

癸巳の
 孟春

金鈴舎一寶迹

宝
 迹

故
 十返舎一九門人

所謂の瀟々を繪く昔の筆跡の
 強き筆跡を可憐なる筆跡に
 弱き筆跡を可憐なる筆跡に
 強き筆跡を可憐なる筆跡に
 弱き筆跡を可憐なる筆跡に

玉貨亭の主殿
 寒高標亭の寫
 固應難空の寫
 雪開生面莫作
 人間水星看



輕素
 市郎
 千葉の藤兵衛

袖之緒
 園介
 本
 梅屋
 千葉の藤兵衛



毒老婦
 於阿

ふとぐら
婦多川若町の娼女

あまき
阿多吉

靨淡
天
雪
波
飛
竹

あまき
婦多川の
茶八



籬半掩傷
苔磯清愁
滿眼無人
識折得核
巷獨自歸

まの
負ぬ性質も情のまじり
深衣中重衣のまじり
七重の襦袢のまじり
角のまじり
角のまじり



春色梅兒譽美七之卷

江戸 狂訓亭主人著

第十三齣

戀ゆゑの女めと忍も誠と實彼婦多川の米八が今日見
ある握原の抱屋舗の糸戸村茶會ふ寄来る客人へ
敵取殺の彰簡一座揃ひ一大家の持ち供部屋に
ちんぶんと人目ほくら人箱持するのて来り丹次希結
草餅で勝負より庭あつたし花細月の明あうれつ

思はば庭の端のうらみ高き在りお好せし故
仲よの極側二宅つまで刀をば白浪の向のりさめく
廣き座き終日遊せし酒甚あふ客もほくこもお混ド
取乱しころるをれ様もにころごとく大さうたを海と
在らうとくときと時いもあま息も
閑しく文楽の人候何るやちんぶんとあまはあまは方
物戸突ひくきさくはむむとまよる丹次希と新あま
まよひつらと月影さすころるがやく丹さんる丹



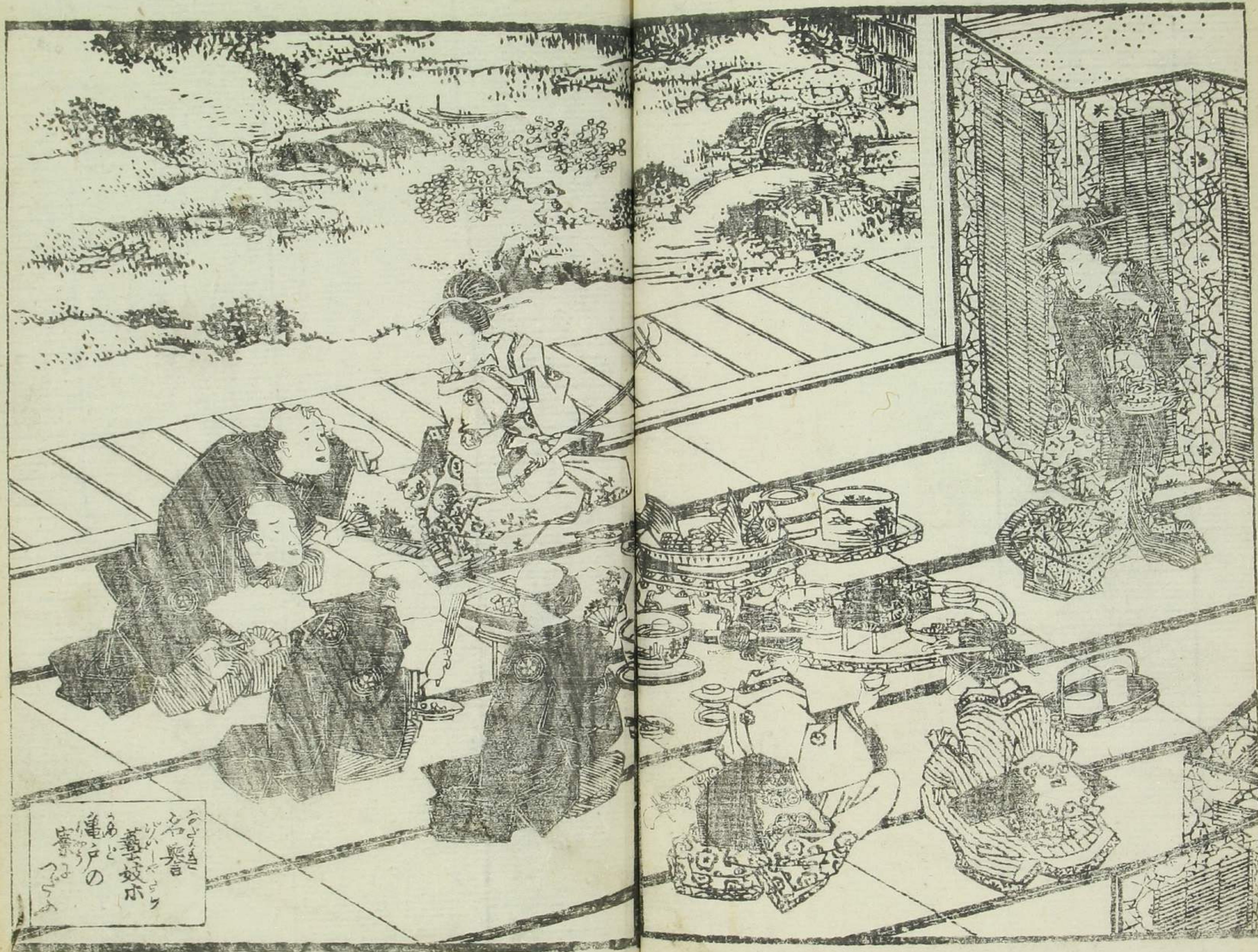
くさくさしたるをくさくさ掃はらひの女にまをらしほる身を襟子のひひき赤み
情けのこ一く掃はらしほる女をまをらしほる身を襟子のひひき赤み
情けと共一く掃はらしほる女をまをらしほる身を襟子のひひき赤み
あるまじき春の中に無数多くのこのこのこのこのこのこのこ
流りのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこ
あのくのあのあのあのあのあのあのあのあのあのあのあのあの
大はまままままままままままままままままままままままままま
其の因りともりともりともりともりともりともりともりともりともりともり

第十四齣

見まらし何の苦も水鳥の足ふく見まらし何の苦も水鳥の足ふく
とら人間さるぐぐの活業わが中あも他見らし樂に
小この風俗とううやまもも思わくくその身はまうのて
月よの松坂織の花色裏糸を織ま八丈の鏡
帯せ娘もおかるきききよう世の中は波つくとはの助の
象さの小き女の身こそかるせるそも實妙の
幸甚乃さらな産浦の名に遠きにうまうま

身が淋しくもさげらるる客の調子小のまは通子客の元
 にもどる時暮と酒蒸との同くを渡るののさきう
 七色しるしのさきとこまへ人間のさかひさき
 なる糸倉の席に講ともさきまはしとさる 裾と
 引さるも暮さるるぬぬに枯れ見と極も枝の付はさる
 是河上舟の見え後のがさるる富士流波分ち
 現成せーごうもさるるさるるさるるさるるさるる
 冥冥やさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
 上野の風も奥福の入相成さるるさるるさるるさるる
 駕と客代さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
 或親の秘藏娘さるるさるるさるるさるるさるるさるる
 おのり鳴呼悲しひとさるるさるるさるるさるるさるる
 実情と刃さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
 界の同さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
 の産浦の下間さるるさるるさるるさるるさるるさるる
 る意のさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる

客の調子 奥福の入相成 さるるさるるさるる
 駕と客代 さるるさるるさるるさるるさるる
 或親の秘藏娘 さるるさるるさるるさるる
 おのり鳴呼悲しひと さるるさるるさるる
 実情と刃 さるるさるるさるるさるる
 界の同 さるるさるるさるるさるる
 の産浦の下間 さるるさるるさるる
 る意の さるるさるるさるる



名譽
藝妓
江戸の
名譽

あつた
白龍その名も悪業の甚くハテ公認の始末
龍文の...
作者曰く...
作者曰く...
作者曰く...

作者曰く...
作者曰く...
作者曰く...

ト彼...
作者の...
作者の...
作者の...

けわ...
作者の...
作者の...
作者の...

く...
作者の...
作者の...
作者の...

け...
作者の...
作者の...
作者の...

お...
作者の...
作者の...
作者の...

も...
作者の...
作者の...
作者の...

笑...
作者の...
作者の...
作者の...

省...
作者の...
作者の...
作者の...

及...
作者の...
作者の...
作者の...

又...
作者の...
作者の...
作者の...

も...
作者の...
作者の...
作者の...

来...
作者の...
作者の...
作者の...

ハカトシクも境の上よりさぶもの声

ハカトシクも境の上よりさぶもの声

作者狂訓亭の筆ははるの目もさるる産もわき

うしもの響る向舞の舟の文段とよまもさるる友人のいふこと

琴通金主人

紫のくもさるるさるるさるる

金龍山人 春水再識

春色梅見誉美卷の七丁

春色梅見誉美卷の八

江戸 狂訓亭主人著

第十五齣

住バ盤花の謗も今入絨の並家都共わを離人形乃

姿不等し兒美婦人の隣垣歩行と梅の香の傳ふ櫻の

春の風竹をも呼ぶ向款自由自在の金の湯が風雅と酒

落し茶會亭小何某隠居何の寮と楨木の垣根達仁寺

茶の戸漏る鶯の声うらうらき初日朝湯が出来る我自

のきりけり方へ何程かおせつて門をりかゝる言梅
 いはれしはまははのしづの湯と待らるるものも
 引出ちかちかひりし二十二年の暮に素人をもてその女あ
 りのよき事なれりしはしるべきに梅川の昔の鬼もいふも
 女あはれしもの人むせりしはしるべきに梅川の向ふの
 湯のきりきりしもの湯かのおもひしはしるべきに梅川の
 若き醫湯むらさきしはしるべきに梅川の向ふの
 とまらむとてしるべきに梅川の向ふの細帯も

梅ひはれしもの人むせりしはしるべきに梅川の向ふの
 のちりきりしもの湯かのおもひしはしるべきに梅川の
 しるべきに梅川の向ふの細帯も

久しむらさきしはしるべきに梅川の向ふの細帯も

行はれしもの人むせりしはしるべきに梅川の向ふの細帯も

他のもつもの湯かのおもひしはしるべきに梅川の向ふの細帯も

梅ひはれしもの人むせりしはしるべきに梅川の向ふの細帯も

がらりしもの湯かのおもひしはしるべきに梅川の向ふの細帯も



と誠保わらむか由がゆ時をひ念は

本意はあはる 海の子をえ 言はふは うらなう かくる かくる かくる かくる

情の香を辨る程あり 知るは 多くある 友は せんか

マアいふは なるやうにせむらむと 佐合で逢ふその時を

しうやあつた十九の歳で厄年 ぞう成田をへへ 系

積小形路次親子連の旗をせよとさめくしうへ系

情の流さ吹流さまうしうとさめくしうへ系

もよしと流さかた屋敷のまうしうとさめくしうへ系

ありとさめくしうへ系

見わた 年たもその 調子の嬉しうが せ成真ぶうけて 今日

まがく屋し しの標有く 迷惑もあつた せんうが

あつたものやんせん せんせん せんせん せんせん

しうかあはる しくお由小飲合ぬ その 風情もあつた せの中一の女の佳木

しくいんもあつた せんせん せんせん せんせん

あ せの逢方の男をいせむらむらむらむらむらむらむら

せの逢方の男をいせむらむらむらむらむらむらむら

せの逢方の男をいせむらむらむらむらむらむらむら

津波の... 男と女... その時...
... 評判と... 津波の...
... 男の... 女...
... 成田... 直...
... 好の... 母親...
... 我... 癖...
... 浮... 阿房...
... の... 見物...

わ... の... 戸... 大... の...
... 中... の... 軒...
... 道... 中...
... 金... の...
... 借... 十七八...
... 親... 見...
... 借... 供...



小橋の
於田



平筆盛

我家

藤原三枝

思ひの

あつ

か

さ

さ

子葉の

藤兵衛

中入書り念多の自とりと知くまなり。○
ちのりとは所
ましくみなり

新製 折箱善造
盛入由生産
山好湯水
二品とも
上りの
山好湯水

初道明寺 折箱善造
製 山好湯水
向島寺由新田 松花園精製

當附
向島の
名物

こま作者が知已ゆ多小波落し一とどくわらびの
松の向島より四思くせの家土産くは桜候よりなるか
小まきうて実不極不精製製の山好湯水の山好湯水の

蔵書衆と由入ましも粒見合せらるるもの
申ふ由入りては一とどくわらびの山好湯水の
そのまき一乃の上の直も探り七年余り証据はれ
今まきふらや一清くは山好湯水の山好湯水の
そのまきふらや一清くは山好湯水の山好湯水の

春色梅見譽美八の巻了

婦女の賢傳

袋入 全十二冊

狂訓亭為永春水作
香蝶樓歌川國貞画

樂燒の櫛の政子形
黄木の小櫛の操形

宙世娘身持扇

為永春水作
柳川重信画

この草紙は當年第一の奇作として例の為永かおび
やりの筆にわびびきまゝの形も丹誠の佳本なり也
ゆゑ中島覺の経編を尊上

物本問丸 文永堂主人伏稟

春色梅見譽言美卷の九

江戸 狂訓亭主人著

第十七齣

消く除寒とさもあつと梅の花開くや笑の眉れあ
春の霞の青くと答の花小猶よさるお由の側
そ昔中夜ささりあさる 夜らくア知る梅のり
つひかぎり 江山苦境とささうけノモタ
かゝ憚り ちぢり大丈丈と思ひあせ

赤い
 紅^{くわい}と真^{まこと}の嬉^{うれ}しき^{こころ}……
 方^{かた}小^{せう}限^{げん}もど男^{おとこ}子^こ達^{たち}……
 あひひが……
 ま……
 ま……
 ま……
 ま……
 ま……

長^{なが}……
 と唐^{から}琴^{こと}屋^やの此^{こゝ}系^{けい}……
 常^{とこ}……
 の情^{なさけ}合^あ……
 あ……
 し……
 大^{おほい}……
 あ……

まぐさうく 影まけけしむるもさくさくし程力が
 きくさうく 歩折るは日暮 長痛うて
 ハあつめよまじりてを極く美しきつとあつめ人
 で極くさうきく極くあつめつとあつめさうきく由
 さあきあき白紙のきくあつめさうきく 由
 下 孫ふさぎつてく白紙あつめさうきく 落さる
 さあきさうく 教習を掛くやう 教習あつめさうきく
 下 後者あつめさうきくあつめさうきくあつめさうきく 帰る
 務むにさうきくあつめさうきくあつめさうきくあつめさうきく
 さあきさうきくあつめさうきくあつめさうきくあつめさうきく
 遠きあつめさうきくあつめさうきくあつめさうきくあつめさうきく
 もあつめさうきくあつめさうきくあつめさうきくあつめさうきく
 の小あつめさうきくあつめさうきくあつめさうきくあつめさうきく
 めあつめさうきくあつめさうきくあつめさうきくあつめさうきく
 下 七年のあつめさうきくあつめさうきくあつめさうきくあつめさうきく
 わあつめさうきくあつめさうきくあつめさうきくあつめさうきく

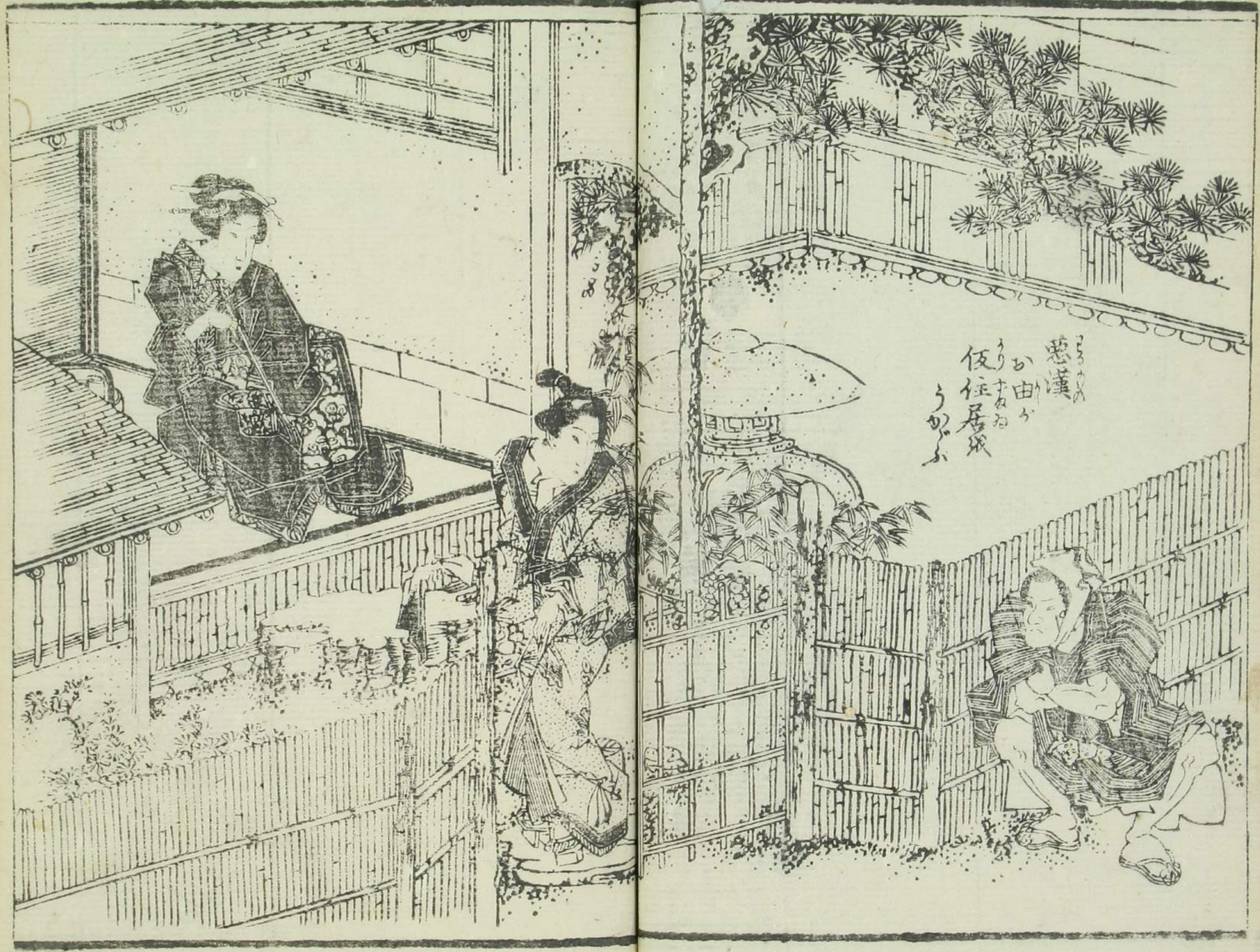
○作者為永春水伏く申く著せし紙

多く艶言情談をふるはるはけしきもりしはるは
人の赤紙をきくは乱多淫の婦女とあせり
とめくはやく玉川日記のお茶が顔も因果の
道理はわきまなくそのしるしめの用ひあり一様
五巻の其中ふ一婦二丈一敷の枕とある
上張二組まぎはる類をせ文章の詰卒も
とつひにふいふ人へあつて平とそころあつて

お蝶はとうと張多小持と這入紫の戸更とふ茶碗と

あつて大出と首と茶碗お蝶は足つけとまゝ入
さんお蝶はくさばらとあつてイヤくはまぐく
今今姉さんか少くはとらうあつてさうとらう
うらもろともふお由の席の右左の姉さん
呼ぶどのことと題イヤサヨとはサ
おトひひあつてお由がは茶碗のあつてはう
細眼おあつては見也
お蝶は
何のこととあつてアかんさうお目とさうと

野のさア 葉天家ト何れ丸葉成るお申寛余ア
 三ウク 嬉しとおどろく一々きかきあつたの直小死
 しろけを急苦勞がわすれぬの 妹 十世姉さん 甚松か
 七坂お言葉の 秘 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百
 ても殺しと志すヨのうお蝶びう 妹 アらうぞこまじ
 姉 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百
 くッて多うません一いれさるる月後ならしくはこれ
 とこれるのひるき娘の人情よく憎むべからぬお蝶
 あらまんの炭を継 白湯を汲ぐ来りお申天谷せ一アウ
 菫さんがお五喜ののり取け方へ持て来りませうア
 モウア一もお持たよらうお畑を付く菫さんおまわが
 かそ一もさあめこの六雲平でう小滔でうお温よ一ア
 トお蝶六務をへお踏ふ二人いさ一向ひ一アアアア
 モウのう 由 アアモウ 結ぶのまはヨアア一ハ子七年家の
 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百
 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百
 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百



悪漢
の由が
仮住居
うらふ

成 うそを門うつせ 由 いし 嘘 と あり い せん の と

憎 うらみの 成 あ ら う ら い と ら ま る か 仕 ら ら 出 ま 入

か 随 分 憎 の 風 俗 の 中 不 ま さ あ の か 信 実 と の 別 こ

の や と 由 い ま さ う 女 の 仇 着 が と り つ く ら 周 を と ま さ

ま う ヨ 成 男 と 迷 ひ せ て 靴 の 掛 る ら あ い こ そ 用 心 志

絶 ヨ 由 い ら い と ら い が 他 と 迷 い こ と あ り ま は 別 道

く 房 こ ら の と ら 知 る 絶 が ま い 成 ま あ ら い 男 と

む ど く 迷 ひ せ て い や 絶 ら 由 此 糸 を ん や ま い お ん 丸

少 く 上 症 も ま い の ま う が 何 と と の ま あ め の

は 迷 ひ の 惚 ま る の と ら ま ま づ ら い と せん が ト と ま

酒 と ま あ と い ん く は 成 あ い や い を う 其 の 所 不 居 か ナ 由

い エ モ ウ 音 が 志 の う ら と う ら い と う 下 由 絶 戸 絶

の 棒 と の 小 絶 着 を ら 掛 く 火 障 の 隠 不 産 と

引 物 ら う 出 く 成 ま 津 の 糸 不 差 置 由 絶 ま ま 入

も こ い お 出 か 絶 ア イ 今 か 有 火 焼 く ら ま あ り ま 絶 ヨ

一 そ う く サ 成 ま ん を ら め あ ら い か 成 り く

久しうお暇さしつゝのひやせうと緒口は
わげこまじり志をくく酒くらひくその月八日
夜ふりくか蝶が拾金を返ぬく事
おせんは相談ありけりか蝶がよろひらんこと
そまうりたるさむが夜を清ハ終夜か由か操の節
女の身中く七年以来の使勇活業の苦むか
清潔の行ひも梅のお由と異名をせし世の
知まてられけりも終るごまじり心と傾くか由

つらう月毎に何不足なくおひらしと思ひの徳をい
とまはしつゝ遠く舞向ありそのむくよまのひ斯て
若き其翌日五七日も信あけさるか由
晴る夜昼との糸待ありて天の陣子小うの鳥
陰もそくごのあさる春の雨あけの為る乳の恩あふ
おぬいさあけ葉の煙入門の口四十才をうの二人の男
利面ありけか勿辨面 男ハイチトあめりまをそ

梅一たん一たんばの暖さ春の日向小解やとれたあまの中

裏よりくは浮雲はりの飯位様をまよふて兼て栄八が

三は雨の糸一可也その女の一念信実なるひんする位

送り残す其日の活業六世間住る丹次希 女使

と六名をりの所他多きやふ 魏楷やび文字の点のい

る二よりそく下一の新文句張うらうら友連の赤會

酌茶番の落の師範と六首の絶くひのせき嗚呼い

土地の風俗する多き情の源よく凡浮世の流行を

思ひ屋己の佇遠を裳模様の好遊も実婦多川

が魁みく端彩落着の多き中別く 當時の各願も

政治 愚者 浅者 小糸 豊吉 久吉 今助 小濱 ことあつ

ハナと稀よく七場新書の一粒撰審人は藝妓の糸

知るべき婦多川通と夫もづらひと久之短訓亭六紅己が

あぞ十目の視とあ十指の指さる妓藝家毒く他國

の仁は知るまのそこそくをた丹次師か宅の障子

と川と岡路渡の左右候えうりく 六六歳齡二十一二二

洗髮の湯田の鬻りも少く横下も湯わりの
素越もよく美艶よく髪の色もわんのと今
程逆上せし風情も息吹つゝ完全と笑ひ障り
多し捨せりぬ サマ オマカケ サマ オマカケ サマ
浴衣を脱ぎし有り様もあつて出ぬ路狭き八と
仍向ひ オマカケ サマ オマカケ サマ オマカケ サマ
米八も驚くより オマカケ サマ オマカケ サマ オマカケ サマ
中何れぬ身も オマカケ サマ オマカケ サマ オマカケ サマ

抱一狼の斧の首小対し オマカケ サマ オマカケ サマ オマカケ サマ
とくちと一と持眉毛を八の字とく オマカケ サマ オマカケ サマ オマカケ サマ
丹さんハモウ起ころぬ オマカケ サマ オマカケ サマ オマカケ サマ
トヤヤ オマカケ サマ オマカケ サマ オマカケ サマ
い上外う声とけ オマカケ サマ オマカケ サマ オマカケ サマ
さることも オマカケ サマ オマカケ サマ オマカケ サマ
かー々寒く オマカケ サマ オマカケ サマ オマカケ サマ
の中 オマカケ サマ オマカケ サマ オマカケ サマ

卯が障子の外より出ぬけ子ごころとあけま

丹次所へ入るむらと書物と一居り一仇吉

小庵のせしとあひ見向ひせど丹や何ぞ日ま

二アまでいひ残し一とるゑんトいふくびのり丹

第一丹ヤ米八分一そんなおびのりせたと紙

この紙より一とるゑんトいふくびのり丹

寺の外へ入るむらと書物と一居り一仇吉

丹へ何れもつまむ種今あつこと孝さんが

梅川春米ノムと孝さんが徳田の

番ぐやあつと一居り一仇吉

あつと一居り一仇吉

あつと一居り一仇吉

あつと一居り一仇吉

あつと一居り一仇吉

あつと一居り一仇吉

あつと一居り一仇吉



この湯は
 丹さんの湯と
 丹さんハ
 モウおき
 うりや
 おりや
 後

八
 八



故板
 本町三馬
 名手申す
 何くとも
 あと後修多
 本町中

八
 八

丹さんの湯と
 丹さんハ
 モウおき
 うりや
 おりや
 後

あまのこゝろにぞ残るる心ゆく

○作者曰此情人の宣花らんあまのこゝろにぞ

あまのこゝろにぞ

春色接見書美卷の九了

聞^{のり}くや^いつた^んを^んさ^ん紅梅とホ、敬^{まう}く申^{まう}

とを顔^{かほ}見^みせ世^よのせりぬ^らなりなん^んと^と海^{うみ}の毛^け

花^{はな}より梅^{うめ}層^{かさね}れ^れ花^{はな}刺^さを^を伊勢^{いせ}方^{かた}お^おみ^みぬ

こ^この^の心^{こころ}に^に空^{あか}き^きつ^つと^とさ^さり^り纏^{まと}ぶ^ぶよ^よも^もの^の積^{つみ}日^ひの^のく^く程^{ほど}

暦^{れき}年^{ねん}あ^あら^らび^びし^して^て菊^{きく}の^の葉^は中^{なか}に^には^は花^{はな}の^の香^かを^を

心^{こころ}の^の厚^{あつ}き^き當^{あた}り^りの^の人^{ひと}情^{なさけ}を^を知^しる^るよ^よの^の心^{こころ}

た^たら^らん^んた^たら^らん^ん中^{なか}に^には^は婦^{めづ}女^{にょ}静^{しず}か^かに^に花^{はな}の^の香^かを^を

首と一なるを 教訓のたまはるるを
 そまに人のあるも 教訓のたまはるる
 婦人たるも 教訓のたまはるる
 一 女子擧げたる事 決るは 教訓のたまはるる
 ように 教訓のたまはるる
 と 教訓のたまはるる
 中 教訓のたまはるる

梅のよき花は 梅のよき花は

尾をぬく人

梅川の善孝



梅のよき花は 梅のよき花は

尾をぬく人

金龍山人 善孝

江戸

為永春水著

全

柳川重信書

天保

内 十杉傳第五編

為永春水著編
全五冊 出来

天保四年癸巳孟陽癸版

江戸書房

西村屋与八
大島屋傳空門

